

風姿花伝第六、
花修云

三

強き・幽玄・弱き・荒きの別

一、能に、強き、幽玄、弱

き、荒きを知る事、大方は

見えたる事なれば、容易き

やうなれ共、真実は知ら

ぬに依りて、弱く荒き為手

多し。

まづ、一切の物真似に、偽

〔口訳〕

演能に於て、強い演出と荒い演出、幽玄な演出と弱い演出とを、識別する事について考へてみるに、それは、大體眼に見える事だから、容易に知り分ける事が出来るかのやうであるが、実際は、真実にわきまへ知らないために、弱くなる為手や荒くなる為手が多いのである。

先づ一切の物真似に於て、偽る所が

る所^{ところ}にて、荒^{あら}くも、弱^{よは}くも
成^なると知^しるべし。この境^{さかい}、
よきほどの工夫^{くふう}にては、紛^{まぎ}
るべし。よくよく心底^{しんてい}を分^わ
けて、案^{あん}じ収^{をさ}むべき事也。
まづ、弱^{よは}かるべき事を強^{つよ}く
するは、偽^{いつは}りなれば、これ

あれば、荒くもなり弱くもなるもの
だと心得るが良い。この境目^{さかひめ}は、良い
加減な工夫公案では、往々にしてまぎ
れてしまふものだ。十分にその心底を
吟味しつつして、了悟自得しなければ
ならない。先づ弱かるべき事を強く演
じるといふのは、物真似に於て偽りが
あるから、これ即ち荒いのである。強
かるべき事を強くするのは、これ即ち
強いのであつて、決して荒いのではな
い。若し、強かるべき事を幽玄にしよ
うとして、物真似が似て居なければ、
それは決して幽玄ではなくて、弱いも

荒^{あら}きなり。強^{つよ}かるべき事に
強^{つよ}きは、これ強^{つよ}き也。荒^{あら}き
にはあらず。もし、強^{つよ}かる
べきことを、幽玄^{ゆうげん}に為^せんと
て、物まね似^にたらずば、幽^{ゆう}
玄^{げん}には非^なくて、これ弱^{よは}き也。
去^さる程^{ほど}に、唯^{ただ}、物まねに任^{まか}

のである。かやうなわけであるから、
ただ、物真似にまかせて、その物に成
り入つて、少しも偽りがなければ、荒
くなつたり弱くなつたりする事は絶対
に無い筈である。又、強かるべき理（程
度）を過ぎて、無暗に強くやるのは、
これは殊更荒いのであり、幽玄の風体
よりも尚優^{やさ}しくしようとする、度
を過ぎて弱くなるのである。

せて、その物に成り入て、
偽り無くば、荒くも弱くも
あるまじきなり。又、強か
るべき理過ぎて強きは、殊
更荒きなり。幽玄の風体よ
り、尚優しく為んとせば、
これ、殊更弱きなり。

この分け目を能く／＼見る
に、幽玄と強きと、別に有
るものと心得る故に、迷ふ
也。この二つは、その物の
体にあり。例へば、人に於
いては、女御・更衣、又は
遊女・好色・美男、草木に

この分け目（強きと荒き・幽玄と弱きの分け目）をよくよく考へて見るに、幽玄と強いといふことが、別に（物真似に真似られる物とは別箇に）あるものであるかの如くに心得てゐるものだから、迷ひが生ずるのである。所が、この幽玄と強きといふ二つは、真似る物その物の体にあるものである。例へば、人に於ては、女御・更衣・又は遊女・美女・美男、草木に於ては花の類の如き、かやうなものは、其のかたちが幽玄なものである。又、武士・荒夷・鬼・神、又草木では松・杉等、かやう

は花の類、かやうの数々は、
その形幽玄の物なり。又、
或いは、武士・荒夷、或い
は鬼・神、草木にも、松・
杉、かやうの数かずの類は、
強き物と申べきか。かやう
の万物の品々を、能く為似

なものは、強いものといふべきであら
う。かやうな様々の物々を、十分に立
派に真似得たならば、幽玄な物の物真
似は幽玄に成り、強い物の物真似は自
然に強くなるであらう。所が、この分
け目を、演出に当つて配慮する事なく、
ただ幽玄に演じようといふことばかり
考へて、物真似のまね方がおろそかに
なると、第一物真似がその物に似なく
なつてしまふ。その似ぬことを覚らな
いで、自分は幽玄に為るのだと思つて
ゐるのが、即ちこれ弱いのである。そ
れで遊女や美男などの物真似を良く似

せたらんには、幽玄の物ま
ねは幽玄に成り、強きは
自ら強かるべし。この分け
目を宛て行はずして、唯、
幽玄に為んと斗心得て、物
まね疎かなれば、それに似
ず。似ぬをば知らで幽玄に

せ得たならば、その芸は自づから幽玄
になるであらう。演者はただ、「似せ
る」といふことばかりを念頭に置くべ
きである。又強い事物を良く似せ得た
ならば、それは自づから強い能となる
であらう。

為^するぞと思^{おも}ふ心、これ弱^{よは}き
なり。されば、遊女^{ゆふ}・美^び
男^{なん}などの物まねを能^よく似^にせ
たらば、自^{をのづか}ら幽玄^{ゆふげん}なるべし。
唯^{たゞ}、似^にせんと斗^{ばかり}思^{おも}ふべし。
又、強^{つよ}き事をも能^よく似^にせた
らんには、自^{をのづか}ら強^{つよ}かるべし。

但^{たゞ}し、心得^うべき事あり。力^{ちから}
無^なく、この道は、見所^{けんしよ}を
本^{ほん}に為^する業^{わざ}なれば、その当^{たう}
世^{せい}くの風儀^{ふうぎ}にて、幽玄^{ゆふげん}を
翫^{もてあそ}ぶ見物衆^{しゆ}の前^{まへ}にては、強^{つよ}
き方^{かた}をば、少^{すこ}し物まねに外^{はづ}
るゝとも、幽玄^{ゆふげん}の方^{かた}へはや

しかし、ここに心得るべき一条がある。それは能楽の道に於ては、残念ながら、見物席の賞美を得る事を根本に置いて芸をするたて、まへのものであるから、その時代々々の世人の風儀好尚で、幽玄なものを賞玩する見物衆の前に於ては、強い方面をば、少々物真似から外れても、幽玄の方へ傾くやうに演ずるが良い。この演出の工夫に関して、能の作者としても亦心得てゐなければならぬ事がある。それは、謡曲の素材には、幽玄な人体のものをとるやうにし、その心・言葉に於ても、十

らせ給べし。この工夫を以

て、作者又心得べき事有り。

如何にも猿楽の素材には、

幽玄ならん人体、まして、

心・言葉をも優しからん

を、嗜みて書くべし。それ

に偽り無くば、自ら幽玄の

為手と見ゆべし。幽玄の理

を、知り究めぬれば、自と

強き所をも知るべし。され

ば、一切の似せ事を能く似

すれば、他所目に危うき所

なし、危うからぬは強きな

り。

分に優雅なものになるやうにと研究工夫して能を書かなければならない。そして、それを演出するに当つて偽がなければ（完全に似せ得るならば）、自づから幽玄なる為手であると見えるであらう。幽玄の理を知り究めたならば、自然と又、強い所をも知るであらう。それで、一切の物真似を十分に良く似せ得たならば、他人の目から見ても、その芸には少しの危気もないものとなる。些の危気も無い芸は又、強き能といふべきである。

然れば、些と有る言葉の響
きにも、靡き・臥す・返る・
寄るなどいふ言葉は、柔ら
かなれば、自ら余情に成る
やうなり。落つる・崩る・
破る・・転ぶなど申は、強
き響きなれば、振りも強か

それで、極く僅かな言葉のひびきで
も、靡く・臥す・かへる・寄るなどい
ふ言葉は、柔らかなひびきの語である
から、自然に幽玄な余情にも成るやう
である。又、落つる・崩るる・破るる・
転ぶなどいふ語は、強き響の語である
から、かやうな言葉に合はす振舞は強
くなるであらう。かやうなわけである
から、「強き」・「幽玄」といふのは、
別にあるものではない。それは、物真
似の偽りなき所に存し、「弱き」「荒き」
といふのは、物真似に外れた所より生
ずるものと知るべきである。

るべし。去る程に、強き・

幽玄と申は、別に有るもの
に非ず。唯、物真似の直な
る所、弱き荒きは、物真似
に外るゝ所と知るべし。

この宛て行いを以て、作者
も、発端の句、一声、わか

以上のべた（言葉のひびきと強き・
幽玄との）あてがひよりして、作者に
於ても、発端の句・一声・わか等に、

などに、人体の物真似に依りて、如何にも幽玄なる余情・便りを求むる所に、荒き言葉を書き入れ、思ひの外にいりほがる梵語・漢音などを載せたらんは、作者の僻事なり。定めて、言

その真似る所の人体の種類によつて、如何にも幽玄な余情や幽玄な風趣の出るやうな文句を要求する所へ、荒い言葉を書き入れたり、思の外にひねくつた梵語や漢音を入れなどしては、それは作者の僻事といふべきである。かやうな文句に従つて、その言葉のままに動作をしたならば、定めて幽玄な人体に不似合な荒唐しい所が生ずるであらう。但し、堪能上手な演者に於ては、その違ひ目（実際に表現すべき余情と、文句・詞の矛盾してゐる点）を十分に心得て、不思議な工夫をめぐらし、な

葉のまゝに風情を為ば、人体に似合はぬ所有るべし。但し、堪能の人は、この違い目を心えて、けうかる故実にて、なだらかなる様になすべし。それは、為手の功名なり。作者の僻事

だらかな様に演出するであらう。しかし、これは演者の功名といふべきものであつて、作者の僻事の罪は決して許さるべきものではない。又他面に、作者に於ては、上述のあてがひを十分に心得て謡曲を書いてゐても、もし演者が心なくしてまづく演ずるとなれば、それは所謂沙汰の限りの者といふべきであらう。これ等に関する注意は、大体以上のべたやうなものである。

は、逃^{のが}るべからず。又、作^{さく}者は心得^{しやえ}て書^かけども、若^もし、為^{して}手の心無^なからんに到^{いた}りては、沙汰^{さた}の外^{ほか}なるべし。これは此^かくの如^{ごと}し。

又、能^{のう}によりて、さして細^{こま}かに、言^{こと}葉、儀理^{ぎり}に拘^か、

らで、大様^{やう}に為^すべき能^{のう}有^あるべし。さやうの能^{のう}をば、直^{すぐ}に舞^まい謡^{うた}い、振^ふりをもするくと、なだらかに為^すべし。かやうなる能^{のう}を、又、細^{こま}かに為^するは、下^へ手^たの業^{わざ}なり。これ又、能^{のう}の下^さがる所

又、能によつては、さして細かに言葉や儀理に拘らないで、大^{おほ}やうに演ずべき能もあるであらう。さやうな能

は、謡も舞も直ぐに颯々と淀みなく謡ひ、振りなどをも、する／＼となだらかに演ずべきである。かやうな能を細かに演ずるのは、これ又下手の所行である。かやうなことをしては、能の伎倆が下るものだと思得べきである。以上のべたやうな次第であるから、作能に際して、善き詞や余情を求めるといふのも、儀理や詰め所がなくてはならぬ能に於ての事である。直ぐなる能では、たとひ幽玄な人体に扮^{こわ}して硬い言葉を謡つても、音曲のかかりさへ確かであれば、それで差支は無いと思ふ。

と知るべし。然れば、善き
言葉、余情を求むるも、儀
理・詰め所の無くては叶は
ぬ能に至りての事也。直な
る能には、仮令、幽玄の人
体にて、硬き言葉を謡ふと
も、音曲の懸かりだに確や

そして、これが能の本格的なものだと心得べきである。しかし、返す返すも心すべきは、以上述べて来たやうな条々の注意を究め尽して、然る後に、大様な演出をするといふのでなくては、能の庭訓を得たものとはいふことが出来ないといふことである。

かならば、これ良かるべし。

これ即ち、能の本様と心得
べき事なり。ただ返々、か
やうの条々を究め尽くして、
さて、大様にするならば、
能の庭訓あるべからず。

此の段は、能に於ける「強き」「あらき」「幽玄」「弱き」といふことについて詳説したもので、第三問答条条の「文字に当る風情」の後半の

又強き弱き事多く人まぎらかすもの也。能のしなの無きをば強きと心得、弱きをば幽玄なりと批判する事あやまり也。何と見るも見弱りのせぬ為手あるべし。これ強きなり。何と見るも花やかなる為手、これ幽玄なり。

といふ条をうけたものである。「能にしなの無き」といふのは、荒きに

相当したものである。

問題は先づ荒きと強きとの区別をつけ、幽玄と弱きとの相違する点を認識するにある。この区別がつかない為に、荒き能や弱き能に墮するのである。それを世阿弥は極めて直截簡明に、物真似に於て、真にその物に成り入るか、成り入り得ないかが、その分れ目であると断じた。真にそのものに成り入り得られる時には、その物真似の対象によつて、或は強く、或は幽玄になる。成り入り得ない時には荒くなり或は弱くなるといふのである。尚此の荒くなり弱くなる原因をつきつめて考へる

と、かやうな弊に陥る原因の一つとして、強き・幽玄は、その模すべき人体に自づから具はるものである事を忘れて、模し工合に、強き行き方や幽玄な行き方がある如くに考へるために、かやうな弊が生ずることがある。しかしそれは間違であつて、物そのものに成り入る時にのみ、強き能や幽玄の能が生れるのである。まことに似せれば自然に強きものは強く、幽玄なものは幽玄になる。然るにその度を越して強くしようと考えたりやさしくしようと試みる所から、或は荒く或は弱く歪んでしまふといふのである。「先づ一切の物真似に、偽る所にて、荒くも弱くも、なると知るべし」といふ語は実に味が深い。

次に問題として示されるものは、観衆の好尚に対する顧慮である。これは物真似の理想と合致しない場合がある。即ち世阿弥の時代には、強きものよりも、幽玄なものの好まれた時代である。「諸道諸事に於て、幽玄なるを以て上果とせり。殊更当芸に於て、幽玄の風体第一とせり」(花鏡・幽玄之入堺事)とも述べられてゐる。従つて、物真似の理想よりいへば、強きものは強く演出するのが理想的演出であるが、幽玄を好む観客の前では、強さからは少々はづれる事があつても、幽玄に傾いた演出をせよといふ注意があたへられてゐるのである。これ物真似の理

想をやや押へて、見物の好みに妥協するのである。妥協といへば卑屈にひびくかもしれないが、見物の関心を失つては、何の物真似の理想ぞやである。ここに世阿弥の苦勞人たる一面が見え、實際家としての偉大さがある。理論に拘泥し束縛されぬ自由さがある。かやうな時代に適応してゆくには、能の作者として心得べきことは、幽玄なる能を作書することが第一に肝要なるは言ふまでもないであらう。それで世阿弥は第三にこの条件を提出し、素材の採り方、文句文章のえらび方も、幽玄第一にと心がけよといふのである。わづかな一語のひびきにも、十分に幽玄に注意し、発端・一声・ワカ等には特に幽玄のたよりとなる語句を

用ひよとのべてゐる。そして、かやうにして作られた能に於て、物真似に偽る所なく、文字言葉に合はせてふりふぜいをするならば、必ず幽玄なる演能となる。そして、かく物真似に於て真にそのものに成り入るならば、他所目に危氣が絶対になくなり、そこに又別趣の強さも生れ出でるものであるとしてゐる。「何と見るも見弱りのせぬ為手、これ強きなり」といふ強さはこの危氣の無い強さである。

最後に、能の種類より考へて、脇能物とか祝言曲とか、所謂能の本格的基本的な能に於ては、堂々とし颯々として些の渋滞もなく、小さい技

巧もなく大様なのがその特色である。かやうな能に於ては、儀理詰め所などはさして必要でなく、従つて又幽玄なる文句や余情を強ひて求めるにも及ばない、と述べてゐる。これも亦一見識を具へた見方である。と称すべきであらう。しかし、ただ単に大様なのが良いといつても、あらゆる体を究めつくして後の大様さと、然らざる素朴的な単純さとは、表面上似てゐるやうでも、実体に於ては雲泥の相違がある。その点を注意して、「返す返す、かやうの条々を究めつくして、さて大やうにするならでは、能の庭訓あるべからず」と結んだ所など、実にしつかりと急所に釘を打込んだものと感心させられるのである。